

## 説教「この町に、私の民が大勢いる」

詩編 七八・一〜四

使徒言行録一八・九〜一〇

牧師 森田恭一郎

『A・D・ヘールに学ぶ』の「伝道旅行の開始」の箇所(四九頁)で中山昇は、伝道戦線も人との出会い、人との繋がりが大きな要素となる、と記して紀州での伝道のことを語っています。一回目の和歌山伝道は上手くいかなかった。二回目では、既に協力者となっていた田辺出身の小幡駒造などが目的地と集会所を定め、親類知己に連絡を取って来会を促して、出かけた所、一八八二(明治一四)年十月十一日、この日は五人の人が待ち受けていて、夜のふけるまで教えを聞いたとある。この田辺にはヘボン博士から西洋医学を学んだ村上春海という医師がいて、群の教育事業の監督の一人もヘボンの教えを受けていた。それだけで、もう人々の心は西洋に対して、ある程度開いていたのであろう。それに小幡の故郷でもある。十四日の日曜日には村上春海医師の宅で昼の集会を、夜の集まりは小幡駒造の宅で開かれ、それぞれ恵まれた集会となった。しかし田辺以外では、適当な場所がなくしばしば海岸が説教所となった、とのこと。人との繋がりが伝道のきつかけを作ります。

中山昇はまたこうも語ります。紀州へ、紀州へ。それはヘール兄弟にとってパウロがトロアスでマケドニア人から聞いた招きの言葉と同じ、キリストの御声であった。何が待っているのかは知らない。ただ、道がそこから拓かれようとしていたの

である。

この招きの言葉とは、パウロが見た幻の中で聞いた言葉で「マケドニア州に渡って来て私たちを助けて下さい」と言ってパウロに願った(使徒言行録一六・九)という言葉です。この言葉を聞いてパウロの一行は、マケドニア人に福音を告げ知らせるために、神が私たちを召されているのだと、確信するに至ったのでした。これは、福音が、トルコのトロアス、アジア大陸から、マケドニアのヨーロッパ大陸に告げ知らされていくきっかけになりました。パウロの一行がヨーロッパ伝道を自ら計画していた訳ではない。幻の中で聞いた招きの言葉に促されて、道が拓かれていったのでした。こうしてフィリピ、テサロニケ、ベレア、アテネ、そしてコリントへ進んでいくのでした。

ヘール兄弟たちも、何が待っているかは分からない、でも福音を告げ知らせるために、神が自分たちを召されている、道が備えら招かれていると信じて、紀州へと赴く。一回目の和歌山伝道は上手くいかなかった。だから次の田辺では集会所の準備をした。でも結果を計算して出かけるのではない。恵まれた集会になったのは恵みの故です。

パウロの一行が無理解や抵抗も受けながら伝道の旅を続ける中、コリントでまた幻を見ます。

「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。私がある」と共にいる。だからあなたを襲って危害を加える者はいない。この町には私の民が大勢いる」(使徒言行録一八・九)。困難な中でパウロはこの言葉に励まされ、確信をもって一年六か月間コ

リントの町に留まって福音を語ったのでした。後に記したコリントの信徒への手紙において、至る所で私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めている全ての人々と共に、キリスト・イエスによって聖なるものとされた人々、召されて聖なる者とされた人々(Ⅰコリント一・二)と十字架で罪あがなわれた聖なる姿を語ります。コリントにも、私の民が大勢いる、主の民が大勢いる訳です。

私たちも、パウロの一行が二つの幻の中で聞いた言葉を、そのまま心に留めたいと願います。ヘール兄弟たちも受け取ったのだと思います。「河内長野にやっ来て、私たちを助けて下さい」と。ヘール兄弟たちも、河内長野の人に福音を告げ知らせるために、神が自分たちを召されているのだと確信したのです。また上手くいかないことは多々あったに違いない。けれどもヘール兄弟たちは、心に留めた。「この町には私の民が大勢いる」。その結果、河内長野にも教会が植えられ、今日に至っています。

設立後の長野教会は困難が続いた。でも富田林教会と協力しながら、各々の町の中で福音を語り続ける。黙ってはいけい。そうやって今に至っている。

また皆さんも、ご家族、ご親族、それに知人友人、お住いの近隣に方々、主の民がいると信じて、教会に誘って戴きたい。皆さんの人との繋がりが伝道戦線の大きな要素です。併せて、皆さんの自宅で家庭集会を開いてみませんか。招かれて、教会も皆さんの町々に出て行って福音を語ります。